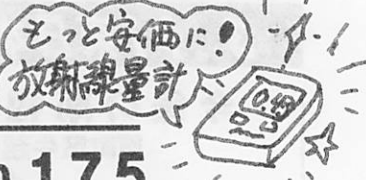


●「大震災・津波・原発事故・避難の体験や思い」を本会報にご寄稿ください。



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.175

2011(平成23)年11月 3日(木)発行

○お池にはまって故郷のお山に帰れないで泣いている避難民の私たちは“ドングリ”です。“自分はどじょう”と言う野田佳彦総理は本当に救ってくれて、早くお山に帰してくれるのか? 歌詞の3番もあとから作られています。

どんぐりころころ (作詞: 青木存義ながよし・作曲: 梁田 貞) ▼3番の作詞者、上から順に

1, どんぐりころころ どんぶりこ
お池にはまって さあ大変
どじょうが出て来て 今日
坊ちゃん一緒に 遊びましょう

2, どんぐりころころ よろこんで
しばらく一緒に 遊んだが
やっぱりお山が 恋しいと
泣いてはどじょうを 困らせた

○元々は1921(大正10)年の「かわいい唱歌」に掲載。作詞者の青木は宮城県松島町の大地主の出身。○原詞は2番まででしたが、右のような数種の3番が作られています。(10月6日『朝日新聞』より)

作曲家岩河三郎・東京佐藤くみ子・横浜ナザレ幼稚園。

3, どんぐりころころ 泣いてたら
仲良し子りすが とんできて
落ち葉にくるんで おんぶして
いそいでお山に つれてった

3, どんぐりころころ 大丈夫
小鳥も助けて くれるから
お山で大きな 木になって
どんぐりたくさん 実らせて

3, どんぐりころころ 池のなか
可愛い坊やを かにさんが
やさしくはさんで とことこと
お山にいっしょに 行きました



3.11東日本大震災・大津波・原発事故・風評・・・私はこう思う ⑨

40年間 事故を危惧し反原発運動を

原町区西町・避難先の滋賀県大津市にて

会員・青田勝彦さん(69歳)

3月14日の午前11時過ぎ、屋内退避中の部屋で「ズシーン」という遠くで花火を打ち上げた様な音が聞こえました。第一原発3号炉の爆発音でした。「ああ、最悪の事態だ。こんな事になるのを避けるために、40年近く反原発の運動をしてきたのに…」と怒りと口惜しさが込み上げ、今後の事を考えて暗澹たる気持ちになりました。

裁判勝訴で安全が保障されたわけではない

思えば、1975年1月に第二原発1号炉の設置許可取り消しを求めて、浜通りの住民が福島地裁に提訴し、私も加わりました。裁判が続く中、スリーマイル島、チェルノブイリの重大事故が起こったにも拘わらず、裁判所は一切考慮する事なく、一審、二審共敗訴し、90年、上告した最高裁でも棄却されました。

裁判で国と東電側が勝ったからと言って、原発の安全が保障されたわけでもなく、その後も問題が続出しました。運動は続けなければならない、との思いで講演会・学習会の開催、街頭宣伝や署名活動、出前講座等にみんなで行き合ってきました。そして何かあると東電に押しかけて抗議や申し入れをしてきたのです。ここ数年は定期的に会見が行われ、ほぼ2ヶ月に一度のペースで行っていました。今年に入ってから2月4日に話し合い、3月22日に次回を約束していた矢先の3月11日でした。

津波対策の申し入れも 東電は一切無視した

事故後、原発を推進した者達は口を揃えて「想定外の天災だ」と発言しました。しかしそんなことは言わせません。我々の「原発の安全性を求める福島連絡会」では

すでに、2005年5月10日付で、東電の勝俣社長に対して、福島原発は現状のままでは1960年のチリ津波級によって想定される引き潮、高潮に対応できないから対策をするよう求める申し入れをしています。それに対して東電は一切無視し続け、今回の事態を招いたのです。まさに「人災」なのです。この東電と国の責任はどこまでも追及されなければなりません。

しかし最近、「原子力村」の住人達はまたそろ、「第一原発の炉は古い型」「第一は沸騰型だが他は加圧水型」「今回の事故で死人は出ていない」「電気が無くて経済活動が止まってもいいの」等と経済界とタッグを組んで原発の再稼働を急ぐと共に、あろう事か、原発の輸出まで画策しています。事故から何を学び、原発に追われて避難者を含めた福島県民の気持ちを何と



ているのだろう。

今私は琵琶湖畔の借家にいますが、家は西岸の静かな所にあり、歩いて四、五分で湖畔に着きます。毎日散歩をしながら刻一刻と変化する景色の美しさに心を慰められています。滋賀県の手厚い支援で、各種行事に招待されたり、私の反原発運動や裁判闘争の事を聞きたいと、集会に招かれて話をしたりで、こちらの人達の意識を少しでも変えられればと思いながら活動しています。

被害者はおとなしすぎる もっと怒りましょう

それにしても東電は憎いです。謝罪にしろ、補償にしろ、いつも上からの目線で、原因の究明も隠し事が多く関係者の処分も甘く、責任をきちんととらない態度も許せません。また、事故後の被害者はおとなしすぎるし、もっと本気で憤り、口に出し、行動したいものです。そして皆さんとの早い再会を願っています。



今後の南相馬市に夢を

原町区牛越・鹿島区山下にて

会員・山城雅昭さん(68歳)

はじめに 3. 11から早7ヶ月。南相馬市は5つの地域に分けられ、緊急避難準備区域は解除されました。しかし何も対処しない国、除染や汚染物の処分先を求めず、復興せよと言われても計画も作れず、行動を起こせないのが現状です。放射線に不安をもつ方々、若者が一向に帰ってこないのも当然です。

私の被災と悪い 7ヶ月も経つと、震災直後の本当に大変だったことが薄れてくるのは、私だけでしょうか。当日書斎に居て、棚からファイルがバタバタと落下し、思わずパソコンを抱いてもう駄目かと思いました。直ちに自地域の組内を保護帽を被って飛び回りました。家屋の被害だけで、人災がなくホッとしました。

しかし、その後の原発事故が大問題で、5力以上の避難先を回った方も多かったようです。暖房もない体育館などは想像を絶する大変さだったと思います。私は9月5日まで2力所で、伊達ふれあいセンターに避難し、伊達市の方々に本当に良くしていただき、足を向けて寝られないくらいです。

南相馬市の現状 1. 現在、市民、有識者、行政で市の復興ビジョンを立ち上げるべく、数回会議を開催していますが、意見がうまく絡み合いません。それは国や県の方針が決まらないことも大きいし、緊急と長期要望者の違いもあるようです。

2. すでに公的な学校、施設などは除染し、緊急時避難区域の解除で学校も再開されつつあります。

3. 警戒区域とホットスポットへの一時立入時間が短く、思うように先んじた施策が行えません。

4. 原発事故の賠償が始まっていますが、あれだけの不法行為を発生させた東電と国は、できるだけ賠償をしたくないのですが、私たち被災者は、既に精神的に病んだり、自費の持ち出しを行っています。

5. 放射線汚染の加害者の東電と国は、しっかり責任をもって、原発事故前の環境に黙って早急に戻さなければならないことは当然のことです。それがどうでしょう。いまだ放射線濃度について明確にせず、市民の不安は増すばかりで、あまりに無責任です。除染の徹底などで放射線量を軽減し、安心して住める環境にしなければ、帰郷できないと思います。

南相馬市に夢を 年内には「南相馬市復興ビジョン」もパブリックコメント(市民の意見を募り)して、決定に持ち込めるものと期待しています。ただ、原発事故の収束や警戒区域の解除が何時なのか、小高区の方々の思いは如何ばかりかと胸が痛みます。

おわりに 南相馬市や浜通り地方の将来は、私たちの双肩にかかっています。如何に行動するか、一個人では潰されたり、威力もありません。思いや考えを一つにして結束して事にあたりましょう。「はらまち九条の会」の「除染要求」の署名活動に、私も駆け回りましたが、まだまだ意識が薄い感があります。もっともっと大きなうねりとなって立ち向かいたいものです。熱いご協力をお願い申し上げます。

放射能を避け 二本松、長岡、横浜、川崎へ

原町区西町・避難先の神奈川県川崎市にて

会員・島中 杏さん(31歳)

3月11日、私は原町区大木戸の借家に高校時代の親友と、お互いに1歳1ヶ月の我が子を抱いて談笑中でした。14時46分直前、テレビで地震警報が鳴ったかと思うと、突然ものすごい地鳴りを聞き、すぐに大きな立て揺れと横揺れで、娘を抱えてとっさに頭に座布団をかぶせました。いつまでもいつまでも震度6強の揺れが続き、6分間の揺れは本当に長く感じました。立ち上がって隣の玄関にささ歩くことも出来ず、たとえ行っても靴なども履けないほどの激しい揺れでした。

地震直後、不気味な空に変わり雪が降ってきた

地震がおさまっても何回も余震があり、外に出てみると、赤ちゃんを抱えた母親が恐怖で泣いていたり、電柱が斜めになり、近くの家の瓦や看板が落ちていました。曇空が不気味に暗くなり、夕方でもないのに鳥の群れが西の山の方へ向かっていました。そして突然雪が降ってきて奇妙に感じました。

一時停電になりましたがすぐに回復し、テレビでは大津波の警報を繰り返していました。しばらくして、東の彼方8キロも離れた海の方に、白い雲のような噴煙を見ましたが、それが今思うと、津波が襲っている様子だったのでしょ。

夫はバックミラーに大津波を見ながら逃げた

しかし地震から約40分後のその頃、消防士の夫は鹿島区右田海岸に並行する道路を、消防車で津波の警戒通報を行いながら巡回中でした。ところが高さ10mから20mほどの真っ黒な壁のような大津波に気づき、バックミラーに見ながら田んぼの砂利道を全速力で逃げ、九死に一生を得た危うい状況にありました。

私が車で町に出ると、自宅近くのガソリンスタンドには車の長い列ができていましたが、私は幸い本町のN商会ですぐに満タンに給油ができました。それがその後遠くまで避難できたことに繋がりました。

鹿島区鳥崎の海から20mの夫の実家は、津波で流失しましたが、私は夫の両親の安否を確認するため、鹿島の避難所を探し回り、避難者でこたえ返す鹿島中学校でようやく両親を確認できました。そしてその夜は友人の家に娘とともに泊めてもらいました。

12日の夜中、娘をつれて車で二本松市へ

翌12日、原発の爆発で放射能の拡散が心配になり、夜中11時、眠っている娘を車に乗せ、真っ暗な阿武隈の山道を二本松の伯母宅に逃げました。夫は勤務があるので、ずっと原町に残ったままです。

さらに14日に伯父の実家の新潟県長岡市に伯父伯母と避難し、そこで九州旅行中だった両親と合流しました。さらに18日に横浜の兄宅へ移り、2週間お世話になり、3月30日に現在の川崎市の借り上げ住宅に、父、母と娘と4人で入居しました。

こんな避難生活をもたらした東京電力に憤りを感じると同時に、娘たちの世代に及ぼす放射能の影響を心配し、風評についても大変悲しく思っています。勿論、一日も早くみんなで原町に帰りたいです。



新刊 『福島は訴える』 福島県九条の会・編 かもがわ出版 ￥1,680

<執筆者・敬称略> 山本富士夫(会員)・大貫昭子(会員)・中里範忠(小高九条の会)・吉沢正巳・中島孝・亀田俊英・渡部寛一・佐藤八郎・真木實彦・吉原泰助(福島県九条の会代表)など、26名